

きくち じょうかい せつ しゅう  
**鞠智城解説パネル集**



歴史公園鞠智城・温故創生館





# 1. 鞠智城とは

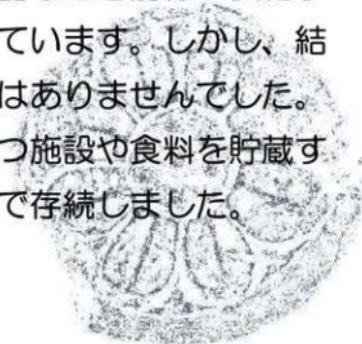


鞠智城は7世紀後半、今から約1300年前に大和朝廷<sup>やまと ちやうてい</sup>によって築城された古代山城<sup>こだいさんじょう</sup>です。この当時、朝鮮半島では、「高句麗<sup>こうくり</sup>」、「百濟<sup>くだら</sup>」、「新羅<sup>しらぎ</sup>」の三国の争いに、中国の「唐<sup>とう</sup>」が加わり、社会的な緊張が続いていました。

660年、唐と新羅の連合軍によって、日本と友好関係にあった百濟が滅ぼされます。日本は、百濟の復興を支援するために援軍を送り込みますが、663年の白村江<sup>はくすきのえ</sup>の戦いで唐・新羅連合軍に大敗し、百濟の救援に失敗しました。その結果、今度は唐と新羅による日本侵攻の脅威に、直接対処せざるを得ない情勢になります。

そこで、大和朝廷は西日本を中心に防衛体制を形成します。九州では最前線基地として金田城<sup>かねだじょう</sup>（長崎県対馬）が築城され、大宰府を防衛するために大野城<sup>おおのじょう</sup>（福岡県）、基肄城<sup>きいじょう</sup>（佐賀県・福岡県）が築かれます。それらの背後に位置する鞠智城は、防衛施設であったと同時に、食糧や武器などを前線へ供給するための兵站基地であったと考えられています。しかし、結果として唐と新羅による日本への侵攻はありませんでした。

鞠智城はその後、役所的な役割を持つ施設や食料を貯蔵する施設などに変化し、10世紀半ばまで存続しました。



## 2. 7世紀の東アジア世界

7世紀の東アジア世界は、どのような状況だったのでしょうか。

朝鮮半島では、唐の高句麗遠征などをきっかけに、高句麗・百済は唐と敵対するようになります。その一方、新羅は唐の制度を積極的に導入し、唐と親密になっていきます。

そのころ、日本は大化の改新の最中で国内の政治体制を整備し始めたばかりの時期にあたります。しかしながら、百済と友好関係にあったため、まだ国内が十分に整わないうちにこの東アジアの大きな動乱に巻き込まれていきます。そして、660年に百済が唐・新羅に滅ぼされると、日本は積極的にこの動きに関わっていきます。中大兄皇子は、663年、百済遺臣の求めに応じて百済復興のための軍勢を派遣します。この日本軍と唐軍が、今の韓国忠清南道の錦江河口にあった白村江において激戦を繰り広げ、日本は大敗を喫し、百済復興の道は閉ざされます。

このとき、日本はその国家史上初めて、外敵からの脅威にさらされることになるのです。



こ たい さんしやう

## 3. 古代山城とは



「<sup>はくすきのえ</sup>白村江の戦い」での敗戦後、日本はその国家史上初めて外敵からの脅威にさらされることとなります。この時、大和朝廷はそれに対するために、西日本の各地で防衛体制の強化を行います。

この防衛体制の強化については、『<sup>にほんしょき</sup>日本書紀』に記載されています。まず664年には、<sup>つくし</sup>対馬、<sup>さきもり</sup>壹岐、<sup>とぶひ</sup>筑紫に防人と烽（<sup>のろし</sup>烽火）が置かれ、筑紫には<sup>みずき</sup>水城が築かれます。その翌年には<sup>ながと</sup>長門国（山口県）に城が築かれ、また大宰府の周囲に<sup>おおの</sup>大野城・<sup>きいじやう</sup>基肄城が築城されます。さらに667年には<sup>たかやすじやう</sup>高安城（大阪府）、<sup>やしまじやう</sup>屋嶋城（香川県）、そして対馬には<sup>かねだじやう</sup>金田城（長崎県）が築かれます。

このような流れの中で、7世紀から8世紀ごろに築城された西日本の山城を総称して「<sup>こだいさんじやう</sup>古代山城」といいます。なお、古代山城の中でも『<sup>にほんしょき</sup>日本書紀』や『<sup>しよくにほんぎ</sup>続日本紀』などの歴史書に記載のある城を「<sup>ちやうせんしきさんじやう</sup>朝鮮式山城」、記載のない城を「<sup>こうごいし</sup>神籠石式山城」と呼びます。鞠智城は、『<sup>しよくにほんぎ</sup>続日本紀』などの文献に記載があるため、朝鮮式山城に分類されます。

古代山城のうち大野城と基肄城については、『<sup>にほんしょき</sup>日本書紀』の中に、「日本に亡命して来た百済の<sup>くだら たつそつ</sup>達率である憶礼福留と<sup>しひふくら</sup>四比福夫を派遣して築かせた」との記述があります。古代山城には、朝鮮半島の最新の土木技術が使用されていました。



## 4. 古代山城の分布



はくすきのえ  
白村江での敗戦後、大和朝廷が国家防衛のために築城した  
はくそんごう  
古代山城は、西日本各地に分布しています。特に、北部九州、  
だざいふ  
大宰府の周辺に多くの古代山城が築城されています。当時の  
やまとちやうてい  
大和朝廷が、北部九州の防衛を非常に重要視していたことが  
わかります。

また、下の分布図を見ると古代山城は北部九州から瀬戸内  
にかけて、分布していることがわかります。これは、当時の  
都であった、「難波宮」や「近江大津宮」などに至るルート  
です。大和朝廷が唐・新羅の連合軍による都への侵攻を想定  
し、防備を固めようとしたことがうかがえます。



古代山城の分布図



## 5. 文献に見る鞠智城

きくちじょう



鞠智城が初めて文献に登場するのは、『続日本紀』の文武天皇2(698)年5月25日の、「甲申、大宰府をして大野、基肄、鞠智の三城を繕ひ治めしむ」という記事です。大野城と基肄城は『日本書紀』に665年に築城されたという記事があります。この2城と同時期に修繕されたということから、鞠智城の築城もこれに近い時期であったと想定できます。

その後、再び文献に登場するのは、『文徳実録』天安2(858)年閏2月の「丙辰、肥後国言す、菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」、「丁巳、又鳴る」という記事です。この時期には、「菊池城」と字が変わっています。

さらに、同年6月20日の「肥後国菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る」、「同城の不動倉十一宇火く」と記事は続きます。

長者原ちやうじやばるや長者山ちやうじやまで、大量の炭化米や、火を受けた礎石が発見されたことは、不動倉11棟が焼失したという記事を裏付けるものでしょう。

『三代実録』元慶3(879)年3月16日の記事には、「丙午肥後国菊池郡城院の兵庫の戸自ら鳴る」とみえます。

こうした一連の不吉な記事が記載された後に、鞠智城のことは一切文献に登場しなくなります。

肥後國菊池郡城院の兵庫の鼓自ら鳴る  
 天安二年五月二十日  
 丙辰、肥後國言す、菊池城院の兵庫の鼓自ら鳴る  
 丁巳、又鳴る  
 六月二十日  
 丙午、肥後國言す、菊池郡城院の兵庫の戸自ら鳴る  
 同日、不動倉十一宇火く  
 同日、長者原、長者山、炭化米、礎石発見



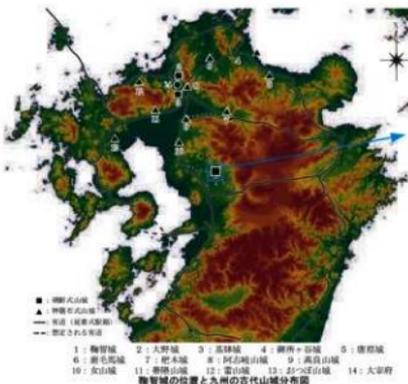
## 6. 鞠智城の位置



鞠智城は熊本県北部に位置し、山鹿市と菊池市にまたがって所在します。北側にそびえる八方ヶ岳（標高1052m）から南に広がる台地の一つである「米原台地」上に位置します（標高約140m）。そのため、鞠智城からは菊鹿盆地を一望でき、遠くは雲仙島原の山々も眺めることができます。

山鹿、菊池の両市にまたがる広大な菊鹿盆地は、古代から県内有数の穀倉地帯として知られています。また、古代には「車路」と呼ばれる道路（古代官道）が通っていたことが想定されています。今日でも多くの幹線道路が縦横に通っており、交通の要所となっています。このようなことは、鞠智城がこの地につくられた大きな要因だったと考えられます。

鞠智城は、大宰府から直線距離で約62kmも離れています。そのため直接的な大宰府防衛の城ではなく、後方支援基地であったと考えられています。また、古代山城で最も南に位置し、南方を広く眺望できるという点から、南方の隼人への対策という役割があったことも想定されています。





きくちしやう

## 7. 鞠智城の範囲

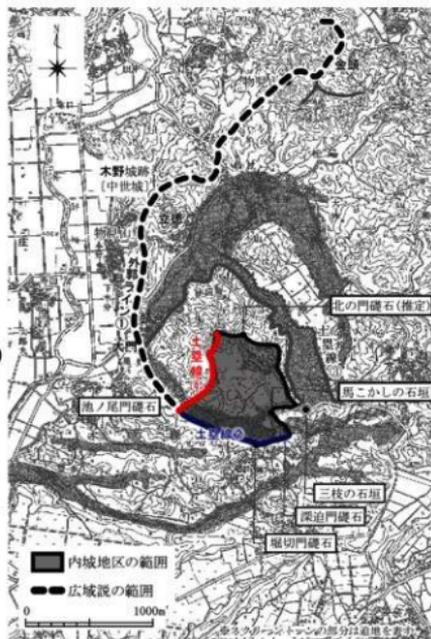


鞠智城の範囲は、山鹿市菊鹿町<sup>よなばる</sup>米原の長者原地区を中心に東西約1.6km、南北約1.3kmで、外郭線の総延長約5.3km、総面積約120haの規模をもっています。そこは、中心域である内城地区（約55ha）と自然地形を取り込んだ外縁地区（約65ha）に区分されます。さらに外側を包括するような地域も城の範囲とする「広域説」があります。

内城地区は、南を南側土塁線（図の土塁線②）で区切り、西は西側土塁線（図の土塁線①）で区切る、周長約3.5kmのラインになります。鞠智城の遺構のほぼすべてが内城地区に集中しており、現在はこのラインによって区画された範囲が、国の史跡に指定されています。

広域説の範囲は、池ノ尾門から大門、さらに頭合、木野、立德と北に延びる低山の尾根をつたい、金頭の山々（標高211.8m）をつたう馬蹄形を呈するライン（図の外郭ライン①）をいいます。

広域説については、調査がまだ進んでいないため、今後確認していく必要があります。



内城地区の範囲と広域説の範囲



### 8. 鞠智城跡の遺構

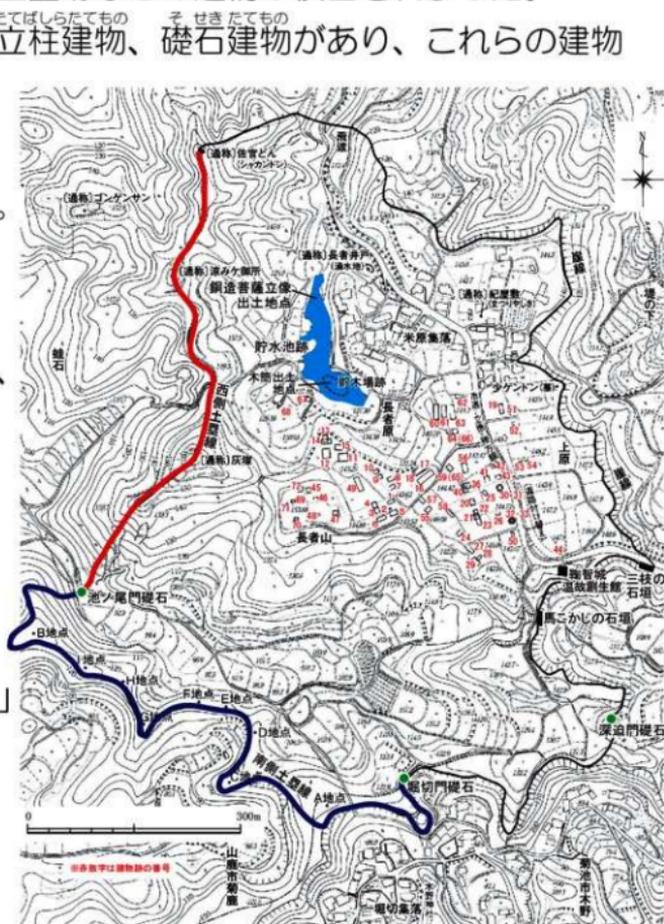
鞠智城跡からは、国内の古代山城では唯一の検出例である八角形建物跡をはじめとする72棟の建物跡、銅造菩薩立像や木簡をはじめとする様々な貴重な遺物が出土した貯水池跡、3カ所の城門跡、土塁跡などの遺構が検出されました。

建物跡には、掘立柱建物、礎石建物があり、これらの建物は倉庫や官舎、兵舎などであったと考えられています。

また、貯水池跡では、木材を蓄えるための貯木場や、水汲み場などがみついています。

城門跡からは、門の礎石などが発見されました。

土塁には「版築」という技術が使用されており、朝鮮半島とのつながりが認められます。



鞠智城跡全体図

きくちしょう

## 9. 鞠智城跡の調査の歴史

年度	次	調査地区	調査した遺構	調査概要
1967 (13)	1	・池ノ内門 ・東山門 ・南門 ・西門 ・西側土塁	池ノ内門礎石 東山門礎石 南門礎石 西門礎石 西側土塁 池ノ内門礎石 東山門礎石 南門礎石 西門礎石 西側土塁	昭和40年代以前出土の土器や瓦片(土器・瓦片)の調査 堀内門礎石 堀内土塁 堀内土塁 堀内土塁 堀内土塁 堀内土塁 堀内土塁 堀内土塁 堀内土塁 堀内土塁
	2	・北側土塁 ・東側土塁	北側土塁 東側土塁	北側土塁の調査 東側土塁の調査
1968 (14)	3	・長巻土 ・堀内門 ・西門 ・東山門 ・南門 ・西門 ・西側土塁	長巻土 堀内門礎石 西門礎石 東山門礎石 南門礎石 西門礎石 西側土塁	昭和42年度に昭和41年に比べての長巻土西側一帯の堀内土塁の調査、昭和43年4月の東山門の土器瓦片の調査 堀内土塁 堀内土塁 堀内土塁 堀内土塁 堀内土塁 堀内土塁 堀内土塁 堀内土塁 堀内土塁 堀内土塁
	4	・長巻土 ・東山門 ・南門 ・西門 ・西側土塁	長巻土 東山門礎石 南門礎石 西門礎石 西側土塁	堀内土塁の調査 堀内土塁の調査 堀内土塁の調査 堀内土塁の調査 堀内土塁の調査 堀内土塁の調査 堀内土塁の調査 堀内土塁の調査 堀内土塁の調査 堀内土塁の調査
1975 (21)	5	・長巻土 ・土塁	長巻土 土塁	長巻土の調査 土塁の調査
1980 (26)	6	・土塁	土塁	土塁の調査
1981 (27)	7	・長巻土	長巻土	長巻土の調査
	8	・長巻土	長巻土	長巻土の調査
1986 (30)	9	・長巻土	長巻土	長巻土の調査
1987 (31)	9	・長巻土	長巻土	長巻土の調査
	10	・長巻土	長巻土	長巻土の調査
1989 (33)	11	・長巻土	長巻土	長巻土の調査
	12	・長巻土	長巻土	長巻土の調査
1990 (34)	13	・長巻土	長巻土	長巻土の調査
	14	・長巻土	長巻土	長巻土の調査
1993 (37)	15	・土塁	土塁	土塁の調査
	16	・堀内門 ・土塁	堀内門礎石 土塁	堀内門礎石の調査 土塁の調査
1995 (39)	17	・長巻土	長巻土	長巻土の調査
	18	・長巻土	長巻土	長巻土の調査

年度	次	調査地区	調査した遺構	調査概要
1996 (42)	18	・長巻土	長巻土	長巻土の調査
	19	・堀内土	堀内土	堀内土の調査
1997 (43)	20	・長巻土	長巻土	長巻土の調査
	21	・堀内土	堀内土	堀内土の調査
1999 (45)	22	・堀内土	堀内土	堀内土の調査
	23	・堀内土	堀内土	堀内土の調査
2000 (46)	24	・堀内土	堀内土	堀内土の調査
	25	・堀内土	堀内土	堀内土の調査
2001 (47)	26	・堀内土	堀内土	堀内土の調査
	27	・堀内土	堀内土	堀内土の調査
2002 (48)	28	・堀内土	堀内土	堀内土の調査
	29	・堀内土	堀内土	堀内土の調査
2003 (49)	30	・堀内土	堀内土	堀内土の調査
	31	・堀内土	堀内土	堀内土の調査
2004 (50)	32	・堀内土	堀内土	堀内土の調査
	33	・堀内土	堀内土	堀内土の調査
2005 (51)	34	・堀内土	堀内土	堀内土の調査
	35	・堀内土	堀内土	堀内土の調査
2006 (52)	36	・堀内土	堀内土	堀内土の調査
	37	・堀内土	堀内土	堀内土の調査
2007 (53)	38	・堀内土	堀内土	堀内土の調査
	39	・堀内土	堀内土	堀内土の調査
2008 (54)	40	・堀内土	堀内土	堀内土の調査
	41	・堀内土	堀内土	堀内土の調査
2009 (55)	42	・堀内土	堀内土	堀内土の調査
	43	・堀内土	堀内土	堀内土の調査



# 10. 鞠智城跡の変遷



鞠智城跡は、様々な検討から約300年間にもわたって存続したことがわかりました。また、その存続期間の中で下表のように、大きく5期におよぶ変遷が把握されました。

年代	鞠智城の変遷	関連事項
7世紀	<p><b>鞠智城Ⅰ期</b></p> <p>掘立柱建物の建築 貯水池跡の造営 城門の造営 土塁の構築</p> <p>兵舎、板倉 貯木場 水汲み場 池尻部 堀造菩薩立像 池ノ尾門 堀切門 深迫門 南側土塁 西側土塁</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>百濟滅亡(660年)・白村江の戦い(663年)</li> <li>防人・烽を設置、水城を築く(664年)</li> <li>長門城・大野城・基肆城を築城(665年)</li> <li>金田城・犀嶋城・高安城を築城(667年)</li> </ul>
	<p><b>鞠智城Ⅱ期</b></p> <p>建物配置の変更</p> <p>八角形建物 コの字配置</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>大野城・基肆城・鞠智城を修繕(698年)</li> <li>稲積城・三野城を修繕(699年)</li> <li>高安城を修理(698、699年)</li> <li>高安城を廢城(701年)</li> <li>平城京へ遷都(710年)</li> <li>茨城・常城を廢城(719年)</li> </ul>
8世紀	<p><b>鞠智城Ⅲ期</b></p> <p>礎石建物の出現</p> <p>掘立柱建物から礎石建物への建て替え</p> <p>荷札木簡</p>	
	<p><b>鞠智城Ⅳ期</b></p> <p>礎石建物の大型化 貯水池中心部埋没</p> <p>礎石倉庫中心の建物構成に変化 貯木場埋没 水汲み場埋没 池尻部のみ機能</p> <p>池ノ尾門の排水機能が低下</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>平安京へ遷都(794年)</li> <li>肥後国が大國に昇格(795年)</li> </ul>
9世紀	<p><b>鞠智城Ⅴ期</b></p> <p>礎石建物の再建</p> <p>茶倉再建</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>菊池城院の兵庫の鼓が鳴り、不動倉1棟が大災に遭う(858年)</li> <li>肥後国山本郡が設置される(859年)</li> <li>菊池部城院の兵庫の戸が鳴る(879年)</li> </ul>
	<p>10世紀</p> <p>池尻部埋没</p> <p>廢城</p>	



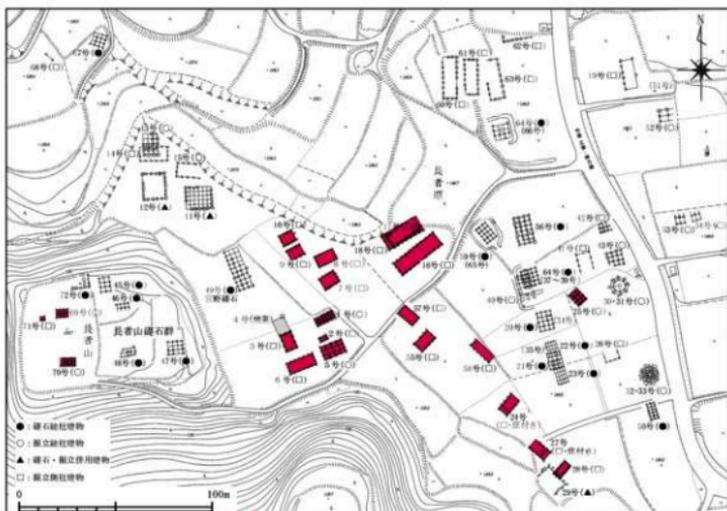
# 11. 鞠智城 I 期の特徴

(7世紀第3～4四半期)



鞠智城の創建期にあたります。堀切、深迫、池ノ尾の各城門みなみがわ にしがわ ど るいせんや、南側・西側土塁線を含む城の外郭線が急速に整備されていきます。それにあわせて、長者山東側の裾部ほりきりと長者原地区中央部に、掘立柱建物群ふかさこ いけ おが構築されます。また城の北側谷部に貯水池が造成されます。これらの年代は7世紀第3～4四半期と考えられます。

城の施設が整備された段階ですが、掘立柱建物は多種多様で、総柱そうばしらの建物が少なく、小型の側柱建物が多く認められます。このことから、外郭線を急速に整備する一方で、城内建物の整備はそこまで進んでいなかったと言えます。つまり白村江の戦い後、中央政権が百濟高官の指導のもと対外的な危機に備えて各地に古代山城を築城しますが、まずは城としての最低限の防御機能を備えることを、重要視していたことが考えられます。



■ : 鞠智城 I 期の建物





### 13. 貯水池跡 ちよすいちあと



貯水池跡は、長者原地区の北側に位置する谷部から発見されました。その後の調査で、総面積は5300㎡となることが判明しました。

池遺構は国内の古代山城で初めての発見であったため、その重要性から数力年にわたって調査が実施されました。その結果、建築部材などを保管するために木材を水漬けした貯木場跡、水汲み場として利用した木組遺構など、当時の技術を知ることができる多くの遺構を検出しました。

また、「秦人忍口五斗」と墨書された荷札木簡や百済系の銅造菩薩立像などの極めて重要な遺物のほか、大量の土器片などが発見されました。



貯水池跡全景（青の線が貯水池の範囲）



貯水池跡発掘調査状況



木組遺構



割られた状態で出土した土器



石敷遺構（護岸のために敷いてある石）



1号木簡出土状況

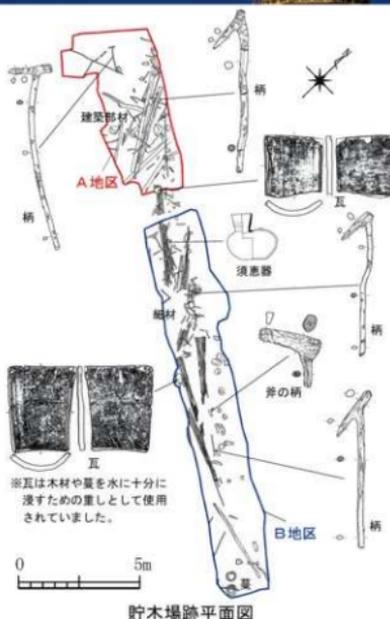


### ちよ ほくしやうあと 14. 貯木場跡



貯木場跡は、貯水池の中につくられた、水に浸して木材などを保管した施設です。貯木場跡は、大きくA地区、B地区に分けられます。A地区では建物の柱に使うような大型の木材が保管されていました。B地区では蔓つるや細材が端を揃え、束ねた状態で保管されていました。このように、場所ごとに保管する木材を仕分けしていたことがわかりました。

これらの木製品もくせいひんなどを保存するためには、水に十分に浸す必要があります。そのため、瓦を重しとして木材や木製品の上に載せるなどの工夫がされていました。



貯木場跡木材検出状況



木材および須恵器出土状況



蔓出土状況



### もくせいひん 15. 木製品について



木製品は、木筒、柄・横槌・鋏などの農工具、建築材、杭、木錘、男性器形木製品などが貯水池跡から出土しました。

木筒は熊本県内では初の発見であり、現在でも鞠智城跡出土例と葦北郡芦北町花岡木崎遺跡出土木筒の2例しかみつかっていない貴重な資料です。「秦人忍<sup>(米カ)</sup>□五斗<sup>ぼくしよ</sup>」と墨書されており、米を納める際に使われた荷札<sup>にらだ</sup>木筒と考えられます。

農工具はどれも粗い加工までなされたもので、最終的な加工を行えばすぐに使用できる未成品<sup>みせいひん</sup>でした。そのため、建物などの修繕の時に備え、計画的に貯木場に建築材などを貯木すると同時に、建築材を加工するために必要な農工具類も一緒に貯木したものと考えられます。

この他、男性器形木製品は貯水池の水枯れを防ぐことを目的とした祭祀など、水辺における祭祀行為に使用された祭祀具であったと考えられます。



建築部材出土状況



細材など出土状況



木製品（柄）出土状況



## 16. 銅造菩薩立像の解説



貯水池跡池尻部から出土した銅造の菩薩立像です。ほそを含む高さ12.7cm、幅3.0cmで、横から見ると優雅なS字曲線を描いています。下部のほそは、<sup>だいざ</sup>台座に差し込むためのもので、太く造り出しているのが特徴です。

その表情は、丸みを帯び穏やかで、<sup>さんめん ほうかん</sup>三面の宝冠、肩まで垂らした<sup>すいはつ</sup>垂髪、両肩にかけられた<sup>てんね</sup>天衣などもよく表現されています。また、<sup>しゅりようき</sup>舍利容器と考えられる持物を、<sup>じもつ</sup>へその前で両手で抱えるように持っています。

この仏像は、7世紀後半の<sup>くだらぶつ</sup>百濟仏の特徴を持つことから、百濟で造られ日本に持ち込まれた可能性が高いと考えられています。このような仏像は、百濟でも相当身分の高い人のみが持つことができたものです。『日本書紀』には、古代山城の築城を百濟の亡命貴族が指導したという記事があります。この仏像は鞠智城へ築城の指導に来た、百濟の亡命貴族が持って来たものかもしれません。



# 17. 銅造菩薩立像の出土状況

銅造菩薩立像は、貯水池跡の最も北側に位置する池尻部から出土しました。池尻部は、池の水を排水する水門や水路などが整えられていたところで、池の機能を維持するうえで、非常に重要な地点です。

この池尻部の最も下に位置する土の中から、銅造菩薩立像は出土しました。仏像は、頭を西に向けた、仰向けの状態で検出されました。なお、この部分の土は他の部分よりも硬く締まっていたため、意図的に埋められていた可能性もあります。

池は城内の生活や城を維持する上で非常に重要な施設です。そのため、池で最も重要な地点である池尻部に、貴重な仏像を埋納し、池が壊れないようにお祈りしたのかもしれませんが。



貯水池跡池尻部空中写真（矢印は銅造菩薩立像出土地点）



銅造菩薩立像出土状況遠景



銅造菩薩立像出土状況近景



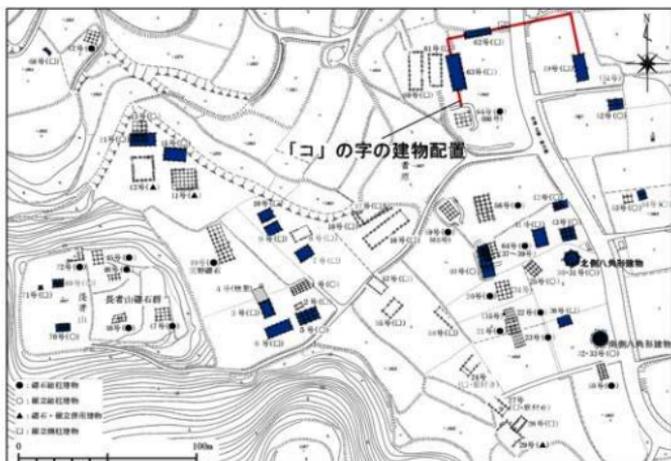
# 18. 鞠智城Ⅱ期の特徴

(7世紀末～8世紀第1四半期前半)



鞠智城の隆盛期です。「コ」の字に配置した掘立柱建物群ほったてばしらたてものぐんや八角形建物はちかくけいたてものが出現します。また長者山に掘立柱建物の倉庫が築造されるなど、Ⅰ期に比べて城内施設の充実が図られています。この城内施設の拡充は、『続日本紀』698年にみられる鞠智城の「繕治」によるものと考えられます。建物を「コ」の字形に配置するのは、当時の役所に認められます。このことから、鞠智城Ⅱ期になると城としての機能だけでなく、役所的な機能も備えたということが出来ます。その背景には、城の近くを古代官道（車路）が通ること等の鞠智城の立地条件も大きく反映していたのでしょう。

貯水池ちよすいちにおける貯木場ちよぼくじょうの建設部材は、このⅡ期段階に貯木されたものが多いと思われる。また、Ⅱ期の土器の出土量が最も多いことから、鞠智城に多くの人員が配置され、施設の充実や、拡大した機能を維持する任務に携わっていたと考えられます。



■: 鞠智城跡Ⅱ期の建物



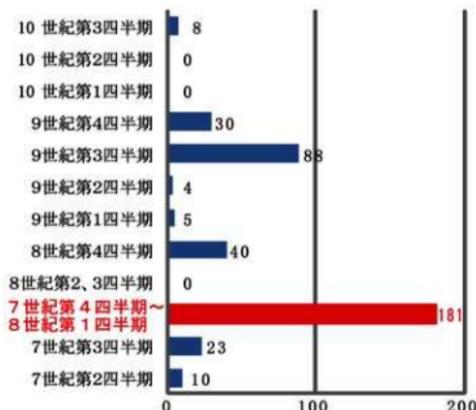
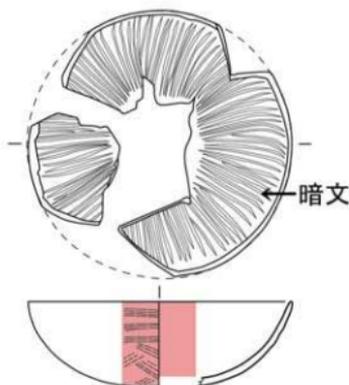
# 19. 鞠智城Ⅱ期の遺物



鞠智城Ⅱ期は、他の時期に比べ圧倒的に多くの日用品として使われた土器が存在します。その大半が須恵器で、土師器がほとんど出土しないという特徴があります。

土師器の出土は若干数ですが、ヘラミガキ調整や暗文など畿内の土師器の特徴をもつことから、畿内からもたらされたり、畿内の土師器を真似してつくったことが想定できます。

須恵器は、福岡県大野城市一帯の牛頸窯跡群のものや、熊本県宇城市周辺の宇城窯跡群のものが認められますし、その他にも様々な生産地の須恵器が出土しています。古代山城は、当時の国家プロジェクトとして築城されたものですので、土器など必要なものは様々な生産地から集められて、城に供給されていたのでしょう。また、土器の多さから、この時期に最も多くの人々が鞠智城に駐留していたと考えられます。



鞠智城跡出土土器の時期別数量比較（数字は個体数）



# 20. 鞠智城Ⅲ期の特徴

(8世紀第1四半期後半～第3四半期)



鞠智城の転換期です。Ⅱ期に築造された掘立柱建物の一部が、小型礎石そせきを使用した礎石建物そせきだてものに建て替えられます。この段階で初めて、鞠智城に礎石建物が出現します。礎石建物への構造的な変化は、建物の耐用年数を長くするためで、長期にわたる城の存続を意図していたことがうかがえます。しかし、鞠智城ではⅢ期に該当する土器はほとんど出土しません。これは、城に多くの人員を常駐させず、維持・管理に必要な最低限の人員のみを配置していたためと考えられます。

貯水池跡出土の木簡もっかんはこのⅢ期のものです。この木簡と同じ形状の木簡は、大宰府が管轄した西海道さいかいどうの範囲や、平城宮へいじょうきゅうで出土する西海道関連の木簡に認められます。このことから、鞠智城はこの時期も大宰府の管轄のもとに維持管理がなされていたといえます。なお、「コ」の字の建物配置はⅢ期にも存続していることから、役所的な機能は継続していたといえます。



■: 鞠智城跡Ⅲ期の建物



## 21. 鞠智城Ⅳ期の特徴

(8世紀第4四半期後半～9世紀第3四半期)

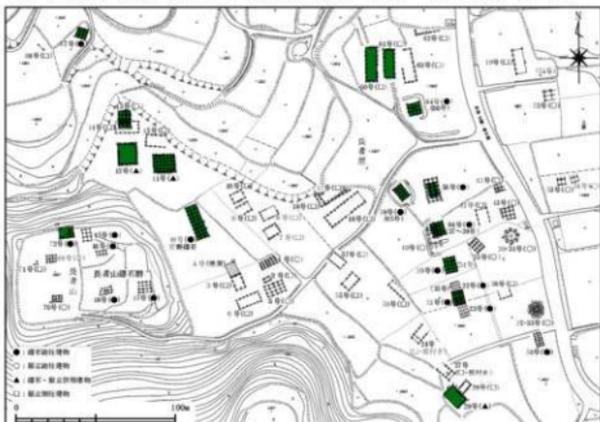


鞠智城の変革期です。小型礎石の礎石建物から大型礎石そ、せきたてものを使用した礎石建物へ建て替えが行われており、礎石建物の大型化が図られています。一方、「コ」の字配置の建物群はなくなり、倉庫が多く認められる建物構成へと変化が生じます。また、礎石建物の礎石の多くに火災の痕跡が認められることから、『文徳実録』天安2（858）年の条に記載のある不動倉11棟の焼失記事との関連を指摘できます。

貯水池でも、貯木場を含む池中央部の維持管理作業（泥さらいなど）が行われなくなります。また、Ⅳ期の終わりには池ノ尾門いけのおもんの石塁の崩壊も生じています。

なお、Ⅳ期の土器は須恵器すえきが一部に認められるものの、そのほとんどが土師器はじきとなり、在地のものが主体となります。

これらのことから、Ⅳ期は鞠智城の機能が大きく変化する時期といえます。特に、食糧等の貯蔵施設としての役割が大きくなっています。大宰府との関連も認められず、在地との関係が強くなっているように思われます。



■：鞠智城跡Ⅳ期の建物



# 22. 鞠智城V期の特徴

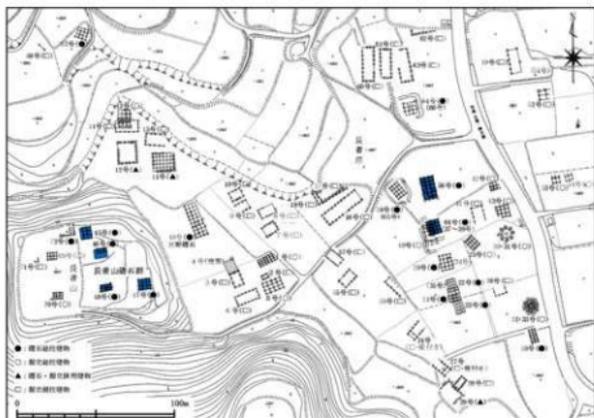
(9世紀第4四半期後半～10世紀第3四半期)



鞠智城の終末期です。IV期に起こった火災による礎石建物の焼失などで、城の機能が著しく低下しています。しかし、新たに大型の礎石建物などが建てられ、また貯水池の北側半分もこれまでどおり機能していることから、城は存続していたものと考えられます。この時期に新たに建てられた建物は、倉庫と考えられます。礎石建物の倉庫が焼失した後に、大型の礎石建物の倉庫を建て直していることから、この時期の鞠智城は倉庫群が建ち並んだ貯蔵施設としての機能がその役割の中心であったと考えられます。

『日本三代実録』には、879年「肥後国菊池郡城院の兵庫の戸がおのずから鳴る」との記事があります。この記事中の「院」は古代の役所などに付随する大きな建物のことです。この菊池郡城院の「院」は、V期の大型礎石建物のことと考えることができるのではないのでしょうか。

この時期を最後に、鞠智城は廃城します。その時期は貯水池が機能を停止する10世紀の第3四半期と考えられます。



■: 鞠智城跡V期の建物



### かわら 23. 瓦について



鞠智城跡からは、<sup>のきまるがわら</sup>軒丸瓦、<sup>まるがわら</sup>丸瓦、<sup>ひらがわら</sup>平瓦が出土しています。その数は、大・小の瓦片を含めて約1万900点にのぼり、その中でも平瓦が約7800点と70%以上を占めます。軒丸瓦については、総数18点を数えます。

これら瓦の大半は、建物遺構が多く所在する長者原・上原地区から出土したことから建物に瓦が葺かれていたと考えられます。また、貯水池跡や、堀切門跡、池ノ尾門跡などからも出土が認められます。

軒丸瓦には、<sup>たんべんはちようれんげもん</sup>単弁八葉蓮華文と呼ばれる文様が施されています。これは、朝鮮半島の瓦の影響を受けたものといわれます。

平瓦は、<sup>ねんどいたおけまづく</sup>粘土板桶巻き作りという製作技法によりつくられたものがほとんどです。表面に残るタタキの痕跡及び調整技法から、いくつかのグループに分類することが出来ます。

鞠智城跡の瓦の年代ですが、ほとんどのものは7世紀第3四半期から8世紀第1四半期のものと考えられます。



瓦の製作工程 (潮見浩1988『図解 技術の考古学』より)



# 24. 城門・土塁について



鞠智城跡からは、<sup>ふかさこもん</sup> 深迫門、<sup>ほりきり</sup> 堀切門、<sup>ちん いけ の おちん</sup> 池ノ尾門の3カ所の城門が見つかっています。門の礎石は、いずれも<sup>か こう がん</sup> 花崗岩製です。特に堀切門の礎石は、一石に2つの<sup>しくすり</sup> 軸摺穴が設けられており、門の幅がわかる貴重なものです。また、堀切門では、城外からの登城道と思われる遺構も確認されました。池ノ尾門では、石罫や水を排水するための通水溝などが確認されました。

土塁は、外部からの敵の侵入を防ぐもので、やせ馬の背のような自然地形を造成し、土を盛るなどしてつくられています。この土塁は、土を積み上げてたたいて固めることを何度も繰り返すことで強固な壁をつくる「<sup>はんちく</sup> 版築」という大陸伝来の技法が使われています。



城門跡と土塁の位置



池ノ尾門の水門



南側土塁線

## II. 鞠智城跡の調査成果



深迫門跡全景

深迫門跡は城域の南東隅に所在し、標高は約123mをはかります。これまでの発掘調査によって、地元で「長者どんの石的」と古くから呼ばれてきた門礎石1基の他、版築土塁やそれに伴う柱穴、石列などが確認されるとともに須恵器などが出土しています。

版築土塁は谷部を挟んだ南北両側で検出され、それぞれ高さが4m以上あり、裾部には土留めのための石列を置く構造となっています。また、同じく土塁裾部からは1.8m間隔で並ぶ柱穴が南土塁で7基、北土塁で8基見つかっていますが、これらの柱穴は版築で土塁を築く際に用いた支柱の痕跡であると考えられています。



堀切門跡全景

堀切門跡は城域の南側に所在し、標高は約122mをはかります。これまでの発掘調査によって、2つの軸摺穴が残る門礎石1基の他、門跡、側溝を伴う道路跡、岩盤削り出しの城壁等が確認されるとともに須恵器や瓦などが出土しています。

確認された門礎石は、1石に2つの軸摺穴が存在する大変珍しい形態で、両軸摺穴間の距離は約2.8mあります。堀切門跡では、門の支柱になると考えられる柱穴が見つかっており、鞠智城跡の城門跡の中で唯一、門跡の原位置が判明しています。



池ノ尾門跡全景

池ノ尾門跡は、標高約90mと鞠智城跡の中でも最も低い位置に所在し、西側、南側土塁線の尾根に挟まれた狹隘な谷部に位置します。

これまでの発掘調査によって、1つの軸摺穴が残る門礎石1基の他、石壁、通水溝、導水溝、盛土状遺構などが確認されています。

石壁は、そのほとんどが崩落しているものの、幅は約9.6mであったことが分かっています。通水溝は、石壁の下を通る暗渠状の排水施設で全長約16mの規模です。通水溝の取水口前面には導水のための導水溝が確認されています。また、石壁の北西側に約20m離れた地点には版築工法を用いた土塁状を呈する盛土状遺構が存在します。



通水溝土器出土状況



池ノ尾門石壁背面石積み検出状況

## 25. 鞠智城跡の整備について

鞠智城跡の整備は、平成6年度から開始され、現在まで続いています。この間、建物の復元、広場の創設、ガイダンス施設の設置、モニュメント広場の設置などを行い、県民あるいは国民の皆様が1300年前の当時を感じることができるような歴史公園としての整備を行っています。

ここ数年は年間の来園者が10万人を大きく超えるほどの多くの方々にご来園いただいています。また、イベントの開催や地元のレクリエーションなど広くご利用いただいています。



現在の鞠智城跡



地元の農家の方が栽培されている赤米の風景



5月のGWイベントの様子



イメージキャラクターのころう君



## 26. これまでの整備



復元建物（左：米倉、右：八角形鼓楼）  
鞠智城のシンボルになっています。



復元建物（板倉）  
武器を保管していたと考えられる倉です。



長者山展望広場休憩所  
長者山地区に建てられた、寝殿風の休憩所です。



モニュメント広場  
防人をかたどったモニュメントを設置した広場です。



灰塚展望所  
灰塚に設置された展望所です。360度見渡せる景観を楽しめます。



園内の様子  
整備された空間は、1300年前の様子を思い起こさせます。



## 27. これからの鞠智城

きく ちしやう



鞠智城跡の調査は、昭和42年度から開始され、これまで32次にわたる調査を実施してきました。その結果、八角形建物跡や貯水池跡などの重要遺構を検出し、木簡や百済系の銅造菩薩立像などの極めて貴重な資料も発見されました。そして、遺構・遺物の詳細な検討から、鞠智城は5期の変遷をたどり、約300年もの間続いた遺跡であることがわかりました。

これまで、鞠智城跡は発掘調査の成果をもとに整備を実施してきました。鞠智城の時代に建っていた建物を復元し当時の様子を体験してもらうとともに、古代の風を感じながら園内を散策することで、1300年前の様子を学習できる歴史公園を目指しています。

鞠智城については、まだまだわからないことがたくさんあります。今後も調査・研究を継続し、鞠智城について新たな事実を明らかにしていきます。そして、鞠智城および古代山城について、よりいっそう理解を深めていただけるような保存・活用を行っていきます。



灰塚から長者原地区を望む





鞆智城イメージキャラクター  
ころう君